

ストレスなど心理的要因で視力が落ちたり目に痛みを感じたりする心因性(非器質的)視覚障害が小児を中心に増えている。眼科医らが治療法を研究する会を立ち上げたほか、「心療眼科」と銘打った専門外来や相談窓口も登場。「目の心身症」への対応が進んでいる。

## 「心療眼科」患者の悩み聞き治療

「多くの眼科医は見るという行為に脳の機能が関わっていることを軽視して」きた。やっと心療眼科医が患者の訴えに耳を傾けるようになった。と井上眼科病院(東京・千代田)の若倉雅登名誉院長は話す。

### 痛みや視力低下

目は人の体の中で最も精緻な感覚器の一つで、目と脳の共同作業で視覚をつかっている。そのため目の機能には異常がなくても心理的影響で様々な症状を引き起こすことがある。心因性視覚障害と呼ばれ、視力の低下、視野の狭窄(ぎょうさく)、目の痛み、まぶしさなどのほか、かすみ、ぼやける、ちかちかする、まぶたがびくびくするなど違和感の訴えは実に多様だ。診断は視力や眼球運動、視野、色覚など通常の眼科検査を通じて、眼球や網膜などに異常がないかを確かめることから始まる。脳腫瘍を疑うケースではコンピュータ断層撮影装置(CT)や磁気共鳴画像装置(MRI)検査をする場合もある。

# 目のトラブルに心のケア



患者からの電話相談に応じる荒川さん(東京都町田市の「目と心の健康相談室」)

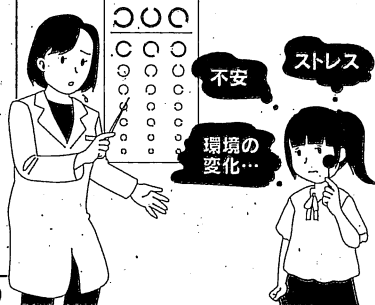
様々な検査で目や脳に病変などの可能性がないことを確認してはじめて、症状の遠因となる心理的側面を探っていくのが一般的だ。都内の主婦、川村定子さん(40、仮名)は5年前に心因性視覚障害を発症した。両眼の視力が低下し視野も狭まり、右目は白内障(ほとんど見えない状態)になった。持病の糖尿病も悪化し、うつ病となり、一時は生きる意欲も失いかけていた。眼科だけでなく精神科や、内科などが連携してケアに当たったことで、徐々に心が前向きになり、右目の白内障手術を希望するようになった。術後、眼帯を外したところ、明るい光が入ってきた喜びで左目も一気に見えるようになった。治療に当たった杏林大病

## 見る行為、脳と密接な関係

子どもの心因性視覚障害に大人が気づくポイント

- ① 急に黒板や教科書の字が見えないと訴える
- ② メガネをかけても見えないと言う(学校検診で視力低下を指摘され、メガネを装着・変更しても改善しない)
- ③ まばたきが増える
- ④ まぶしさを訴える
- ⑤ ①～④が新学期や新規の習い事など環境の変化を契機に生じた

(井上眼科病院の若倉雅登名誉院長の話を基に作成)



### 心因性、子どもに多く 「1学級に1人」分析も

原因の過半数はストレスが関係していると考えられ、何らかのストレスが目の症状として表れると考えられている。原因は家庭関係には肉親の死や両親の不仲、離婚、親の過干渉などが多く、学校関係では入学や転校、友人とのいざこざなどが隠れていることがある。浜松医大病院眼科の佐藤美保医師は「仲の良い友人がメガネをかけた始末だから自分もかけた、という思いや親を独占して医療機関に行きたいなどの気持ちで働いている場合もある」と説明。子どもの微妙な心理

院(東京都三鷹市)眼科の気賀沢一輝医師は「視覚障害の真の原因は心にあったので、右目の手術で生きる意欲を取り戻したことで劇的に改善したのだ」と語る。患者、家族からの悩み相談に応じるのは東京都町田市のNPO法人「目と心の健康相談室」だ。心因性視覚障害の治療には、十分な時間をとって患者の話を聞く必要があるが、多くの患者が訪れる通常の眼科診療

の現場では難しい。そこで眼科医と眼科勤務歴の長い看護師らが2015年に同法人を開設した。週4日、電話相談を中心に対応する。「1カ月の相談は約60件。6割が女性で60〜70代が半分近い。主治医には言えない悩みを吐き出して気が楽になったという人が多い」と荒川和孝理事長(66)は話す。目の病変の治療に特化した

科の専門外来を設ける動きもある。神経眼科で診療している医療機関もある。こうした治療に詳しい医師や医療機関は日本心療眼科研究会(<http://www.eye-center.org/jpos/>)や日本神経眼科学会(<http://www.pj-ww-shinkei.or.jp/>)などに掲載されている。目と心の健康相談室は042・719・6236(月・水・木・金の午前9〜午後5時)(編集委員 木村彰)

## 医療健康